

The Structure of the Chapter of Chi-wu-lun (齊物論)  
in Chuang-Tsu (莊子) — especially the latter half of  
this chapter —

Akira Sato

ABSTRACT

This paper is a part of the series of my research on Chuang-Tsu. In another paper I related the first half of Chi-wu-lun. The first half consists of one long story. I came to the conclusion that the original works of Chuang-Chou (莊周) are included in this story, and I guess this part is written in record style like the form of Lao-tsu (老子). So in this paper I argue about the latter half of this chapter. The latter half consists of four stories. I insist that the second story in the latter half also has the records of Chuang-Chou.

In this paper I also research the structure of each story of the latter half of this chapter. Each of these stories is independent. The result of my research is that this chapter was edited in a later period, and the works by Chuang-Tsu are actually included, but are only a part of this chapter. And also I believe that the inner chapters of Chuang-Tsu (莊子內篇) are not the works of Chuang-Chou, except some parts of a chapter of Chi-wu-lun.

則無由入矣。若神明、四通並流、無所不極、上際於天、下蟠於地、化育万物、而不可為象。俛仰之間、而撫四海之外。照照何足以名之。」

故老子曰、「天下之至柔、馳騁天下之至堅。」

となつてゐる。齊物論篇及び寓言篇の説話では、問答の主体である罔兩(うすかげ)と景(かげ)がそれぞれ自体擬人化されており、それぞれの性質を描写しているところにその面白味があり、それがこれらの説話の生命であるともいえる。それに対し道応訓の説話では、罔兩と景自体の性質とは無関係に話が形成されている。おそらく罔兩の問いに「照照者、神明也。」ともあるように「光」に係る内容の問答であるので、その主人公を齊物論・寓言篇の説話にヒントを得て罔兩と景にしたものと考えられる。従つて道応訓のこの説話は、『莊子』中の二つの説話より後に作られたものと考ええる。

注八、なお先の部分について、1の部分の最後の「然則我与人俱不能相知也、而待彼也邪。」の直後に「化声之相待、若其不相待。和之以天倪、因之以曼衍、所以窮年也。」の部分が続いたものが本来の形であるとしてテキストを改める考えもあるが、これは2つの部分に「待」の語があることより、それより連続させようとしたものであり、先の見解よりこれらの「待」の語は必ずしも同じ意に使われたとは言えず、テキストを改める見解には賛成できない。

注九、「『莊子』養生主篇をめぐって」(前掲)参照。

寓言篇の冒頭の寓言・重言・卮言の表現は用いているものの、『莊子』中の説話を莊周が書いたものとして考えていることより、寓言篇よりは後の成立であり、『莊子』中の説話の多くの部分を念頭においているわけであるから、『莊子』の中でもかなり新しい時期の成立であると見ることができらる。

齊物論篇は、全体を一貫したものとするのが従来の一般の見方であるが、小論においてはそれぞれの説話は独立したものであり、さらに一と三の説話においては語録を取り込んでおり巧みに編輯されたものであると考える。齊物論篇が優れたものと考えられてきたという点に関して、私見においては二義があると考ええる。第一はそれぞれの説話の質の高さによるものであり、第二にはそれらを巧みに編輯した編輯の技術によるものである。とりわけ『莊子』の最も古い部分であり同時に核となる語録の部分を取り込んだことが、齊物論篇がより重要な意義を持つ理由にほかならないのである。

注一、「語録としての原本『莊子』」（『九州中国学会報』第二十四卷、昭和五十八年）参照。

注二、「『莊子』養生主篇をめぐって」（『九州大学文学部哲学年報』第四十八輯、平成元年）・「『莊子』の説話の側面―逍遙遊篇の恵子・莊子問答を中心にして―」（『九州中国学会報』第二十七卷、平成元年）参照。

注三、「『莊子』の説話の側面―逍遙遊篇の恵子・莊子問答を中心にして―」（前掲）参照。

注四、『莊子』の説話がいくつかの類似した説話群よりなるという見解については「『莊子』養生主篇をめぐって」（前掲）においてその一端を示した。ここでは養生主篇の説話を取り上げ、それと類似の説話

が内・外・雜篇を問わずに認められることより、多くの説話群があった、その中より養生主篇編輯の際に編輯の意図に最もふさわしいものを選択したのであると推測した。なおここで言う説話群とは、同時に同一人かあるいは同様の傾向を持つグループなどによって作られたであろうものということであり、厳密なものではなく説話の傾向とでも言う緩やかな意味である。

注五、「論説部」について一二・一三などと付した番号は、「語録としての原本『莊子』」（前掲）において章分けしたところによる。

注六、もし仮に語録としての原本『莊子』が莊周の手になったとして、なおかつ『莊子』中にある説話も莊周の手になるという可能性は全くないといえない。しかし、『莊子』中の説話については幾つかの説話群に分類することも可能であるが、それらの説話群の間には、傾向の違いが見られ同一の作者によるものとは考えにくいことは別稿において記した（注四参照）。さらに付け加えれば、同一の説話群であってもそれが内篇と外雜篇とにかかわらず見られ、内篇と外雜篇との間には説話の質の違いがあっても傾向の違いは見られず、例えば内篇のみを莊周の手になるとかいうように同一人物の手になるといふことは考えにくいことである。このように見れば、原本『莊子』が莊周の手になるとして『莊子』中の説話の一部、あるいは莊周が説話の形で思想を表現する示唆を何らかの形で示したということは考えられるが、説話の多くの部分を莊周が記したとは考えられない。

注七、『淮南子』道応訓では、

罔西問於景曰、「照照者、神明也。」

景曰、「非也。」

罔西曰、「子何以知之。」

景曰、「扶桑受謝、日炤宇宙。炤炤之光、輝燭四海。闔戶塞牖、

## 五、莊周が夢に胡蝶となった話

さらに、一と三の後半の部分については、それぞれの前半とは異なる資料であり、語録である可能性もあるということについてはすでに論じたとおりである。齊物論篇の構成を見るに当たって、まず逍遙遊篇との比較において考えてみる。逍遙遊篇においては、篇全体が一つのテーマのもとに展開しているようにもとれ、篇全体の構成に細かい気が配られているようにも見られる。一方齊物論篇の場合はそれぞれの説話については、四の説話が「待」の連想より三の説話の後に付されたとは言えても、篇全体を見た場合は、ことさらに結び付けようとして気を配ったようには見られないのである。齊物論篇の場合は、それぞれの説話をつなげれば、そこから自ずから一つのテーマに結びつけることはできるのであるが、逍遙遊篇のように説話と論説文を巧みに織り込んで、説話にながしかの意味を付そうとした点はないということである。つまり説話にながしかの説明を入れて材料として取り込んでいるのではなく、説話を説話としてそのままの材料として取り入れているのである。ただ齊物論篇の場合、一と三の説話の最後に語録を接続したという点において、編輯の痕跡を認めることはできる。一と三においては、それぞれ前半と後半とは表現形式が異なっているが、一でも三でも前・後半とも極めて巧みな文より構成されているのは確かである。

しかし、全体として見れば、齊物論篇と逍遙遊篇とはその構成等において似かよっている点が多い。その第一の点として齊物論篇の説話の中に、逍遙遊篇のものに類似したものがあるということである。すでに述べたように二の説話と三の説話の前半部分は逍遙遊篇の説話のあるものと似かよった点が認められる。また説話の質についても、齊物論篇の五つの説話はかなり高い内容を持っているが、説話の質の高さについては、逍遙遊篇の場合でも極めて優れているということは確かである。このように見れば

逍遙遊篇も齊物論篇も構成の仕方においてやや異なっているが、選択された説話の質の高さ、おそらくそれらの説話は多少なりとも編輯の際に手が加えられたり新たに配列されたのであるが、その編輯の巧みさにおいても両篇共通しており、同一の状況のもとに編輯されたのであろう。また養生主篇についても、これら二篇にはやや劣ると思われる所もないではないが、やはり巧みに手が施されており、これら二篇と同一の状況のもとで編輯されたものであると考える(注九)。逍遙遊と齊物論の二篇、あるいは養生主までを含めた部分を莊周の自著とする考えがあるのも、これら二篇なり三篇が優れた内容のものであり、また類似性もそれらの中に見られることによるのであろう。以上のことを考え合わせるに、これら三篇は近い性格を持つものであり、同一の状況のもとで編輯されたものであると考える。

また一と三の後半についてはすでに論じたように語録であると考えることができ、おそらく『莊子』のもとになった原本『莊子』の部分であったと推定できる。一にせよ三にせよ語録の形をしたものを、意図的に説話の中に取り込もうとした痕跡が見られる。そのことは一と三の前半の説話について極めて優れた内容のものが選択あるいは創作されていることから窺え、また編輯の痕跡を隠すかのように巧みに縫い合わされているように見える点からもこのことが知られる。

現時点における結論としては、『莊子』の原形は語録であったと言うことがまず第一に指摘できる。さらにその語録に述べられている思想から展開して、その思想を説話の形で表現する傾向が出てきたのであろう。この間の事情についてはまだ考察に及んでいないが、あるいは先に引用した寓言篇冒頭の文章が、語録からの文を引き、それをもとに表現形式について論を進めていることより、この転換期に作られた文献でありその間の事情を示唆する文章である可能性はある。なお天下篇の莊周に対する記述は、

ここでの中心の概念となる語は、あくまでも「天倪」であり、あるいは「曼衍」である。その前の句はそれに至る説明で、「A若B」という文型であり、要するにAもBも変わらない、同じであるといっているのであるから、「待」の語に対して特に深い概念を持たせるようには思われない。それに対してこの説話では「待」自体に重点があり、具体的には「依る所の者」ということであり、これ自体がここでのテーマになっている。このように見ればこの説話は「待」ということの連想でここに置かれたといふことは言えても、これら全体が本来連続した部分であるとは考えられないのである（注八）。

さて次の②についてであるが、これも独立した説話であることは確かである。『莊子』中の説話の中に莊周または莊子に関する記述がこの部分を入れて三十一箇条あるが、これに類似した形式のものはこの他にはない。この部分を見る限り、莊周という人物があり、彼自らがこの部分を記したかどうかについては断定する材料に欠ける。ただ逍遙遊篇にしろ齊物論篇にしろ最後に莊周に関する説話が載せられており、その点からいうならば、これらの文献を莊周という人物に関係づけようという意図のもとにこのような編輯になったと見ることもできるのである。

さてこの部分が莊周の手になったにしろ莊周に擬せられたにしろ、表現の上で注目すべき特徴があることが指摘できる。それはこの部分は確かに説話と見ることができ、同時に論理的主張を主体にしたという点において語録に近い面もある。つまりここでは主張したいことがあり、その主張を明確に印象深いものにするために例えを設けたと見ることができ、その例えは、この例えは相対的なものであるということを中心としたものである。ここで仮に物は相対的なものであるということを中心とした例えであったとすれば、そのために「莊周が胡蝶になった夢」というものをその主張を効果的にするために持ってきたのであろう。もし莊周が実際に胡蝶になった夢を見て、そのことよりそれに続く主張が導かれたのであったと

しても、ここではやはりその主張を述べることが眼目であり、夢に胡蝶になったということはやはりその例に過ぎないということである。莊周が夢に胡蝶となったということ、説話ではなく論理的文章における表現の一例と見ることができるのである。またこれが論理的文章であり、短く簡潔であり、莊周なら莊周個人の個人的体験に基づくところより導かれたことを記したのであるとすれば、それはまさに語録としての要素を持っているということがいえる。あるいはまたこの説話が莊周に擬したのであったとしても、それは莊周の語録に擬したということであり、この部分が語録的要素を持つという点では同じである。②の説話について以上の立場より、

昔者莊周夢為胡蝶、栩栩然胡蝶也。自喻適志与。不知周也。俄然覺、則遽遽然周也。不知周之夢為胡蝶与、胡蝶之夢為周与。周与胡蝶、則必有分矣。

の部分と最後の  
此之謂物化。

の部分との二つの部分に分けることができる。前半がいわば例示であり、後半がそこから導かれることの主張である。つまりここでは「物化」ということの例示として前半の例えを引いたともとれるのである。

## 結 び

さて、最後に齊物論篇全体としての構成を見てみたい。齊物論篇の説話を並べると次のようになる。

一、南郭子綦と顔成子游との問答

二、齧欠と王倪との問答

三、瞿鵠子と長梧子との問答

四、罔兩と景との問答

○寓言十九、藉外論之。親交不為其子媒。親父譽之、不若非其父者也。  
○重言十七、所以已言也、是為耆艾。年先矣、而無絳緯本末以期年耆者、是非先也。

○卮言日出、和以天倪、因以曼衍、所以窮年。

とあるように、寓言・重言の記述が具体的な事物に託して説明しているのに対し、卮言の記述は抽象的である。しかも、この文章は論の展開から見ても寓言や重言ではなく卮言の主張に中心が置かれていることは確かである。卮言が三つの中で最高の位置に置かれ、その概念を説明するに当たって語録の可能性のある原本『莊子』から引いたかもしれないということ、とりもなおさずこの語録を抛り所とするだけの価値のある文献と見なしていたと考えることができるのである。

あるいは、この寓言篇冒頭の記述は、語録として記されている主張と同様の主張を、さらにそれより展開される主張を説話の形式で記すことを示唆した文献であるかもしれないし、また自派の思想を説話の形で表現しようとする運動が盛んになされたその中で制作されたものである可能性も考えられるのである。

### 三、

齊物論篇の末尾には二つの極めて短い説話が付されている。

①、罔兩問景曰、「曩子行、今子止。曩子坐、今子起。何其無特操与。」

景曰、「吾有待而然者邪。吾所待又有待而然者邪。吾待蛇蚺蜺翼邪。

惡識所以然。惡識所以不然。」

②、昔者莊周夢為胡蝶、栩栩然胡蝶也。自喻適志与。不知周也。俄然覺、則遽遽然周也。不知周之夢為胡蝶与、胡蝶之夢為周与。周与胡

蝶、則必有分矣。此之謂物化。

①の説話については、これに似たものが寓言篇にある。寓言篇の方では、衆罔兩問於影曰、「若向也俯而今也仰、向也括而今也被髮、向也坐而今也起、向也行而今也止、何也。」

影曰、「叟叟也、奚稍問也。予有而不知其所以。予、蜩甲也、蛇蛻也、似之而非也。火与日、吾屯也。陰与夜、吾代也。彼吾所以有待邪。而況乎以有待者乎。彼来則我与之来、彼往則我与之往、彼強陽則我与之強陽。強陽者又何以有問乎。」

となっており、明らかに同系統の説話である。なお『淮南子』道應訓にも罔兩と景の登場する説話があるが、これは少し傾向が異なる(注七)。齊物論篇のこの説話もこれ自体独立したものである。ただここで前の部分との関連で注意すべきことがある。ここでのテーマの中心は「待」ということについての議論であるといってもよい。とするとこの説話の直前の部分で繰り返し「待」の語が出てくるが、そのこととどう関係するのかということが問題となる。結論よりいえば、おそらく編輯の際「待」という連想から前の部分の後にこの問答を付したのであろう。これら二つの部分において「待」の語の使われ方に違いが認められる。「待」の語は1・2の中でそれぞれ見られるが、1では「然則我与若与人俱不能相知也、而待彼也邪。」とあり、二の部分では「化声之相待、若其不相待。」という表現の中で用いられている。1の部分の「待彼」の「彼」は第三者であり、ここでは議論の判定者として第三者の判断を仰ぐという意味である。しかもこの部分では「而待彼也邪。」の表現自体反語であり、「待彼」について懐疑的に見ているわけで、従って「待」という言葉に特に深い意味を持たせているように思えない。また2の部分については、「待」の意が明確でなく様々の解釈があるが、いずれにせよ「化声之相待、若其不相待。和之以天倪、因之以曼衍、所以窮年也。」という文脈の中で用いられており、

可乎可、不可乎不可。道行之而成、物謂之而然。惡乎然、然乎然。惡乎不然、不然於不然。物固有所然、物固有所可。無物不然、無物不可。

に非常に近い表現であり、一方が一方から引いてきたか、あるいはこれらのもとになった文献がありそこから引いてきたであろうことは明らかである。寓言篇のこの部分が〔論説部〕と2の部分との両方から引用したであろうということより、〔論説部〕と2の部分とが、もとは一つのものである、寓言篇のこの部分はあるいはそれらのもとなる文献より引いてきたという可能性も考えられるのである。少なくとも寓言篇のこの部分の論者は、〔論説部〕と2の部分とが同様の性格を有するものと見ているのである。このことから、先に述べたように瞿鵠子と長梧子の問答からなるこの説話の後半部分は、〔論説部〕と同じように語録的性格を持つものである、〔論説部〕と本来一つの文献であった可能性が高いといえる。

さらに天下篇の莊周の思想について論評した部分に明らかに寓言篇のこの部分に基づいたところがある。

寂寞無形、變化無常、死与生与、天地並与、神明往与。芒乎何之、忽乎何適、万物畢羅、莫足以婦、古之道術有在於是者。莊周聞其風而悅之、以謬悠之說、荒唐之言、無端崖之辭、時恣縱而不儻、不以臆見之也。以天下為沈濁、不可与莊語、以卮言為曼衍、以重言為真、以寓言為広。独与天地精神往來而不敖倪於万物、不譴是非、以与世俗処。其書雖壞璋而連犴無傷也。其辭雖參差而詛詭可觀。彼其充夷不可以已、上与造物者遊、而下与外死生無終始者為友。其於本也、弘大而闢、深閔而肆、其於宗也、可謂調適而上遂矣。雖然、其於化而解於物也、其理不竭、其來不蛻、芒乎昧乎、未之尽者。

右に挙げたのが莊周に対する評論であるが、傍線の部分において卮言・重言・寓言と列挙しているのであるから、これが寓言篇の先の記述を意識し

ているのは明らかである。ただ天下篇の作者が小論という原本『莊子』を見ていたかということになるとその可能性は少ないといえる。天下篇の傍線を施した部分「以卮言為曼衍、以重言為真、以寓言為広。」の表現は明らかに先に引用した寓言篇の部分との関係が認められ、おそらく天下篇の方の表現が寓言篇のものを襲ったのであろう。天下篇の論評はもとより天下篇の作者が莊周が書いたと考えたとする部分に対してのものであるから、その表現の中で卮言・重言・寓言を莊周が用いたとする意であるからには、天下篇の作者は莊周が、卮言・重言・寓言を駆使した創作を行ったと見なしているわけである。天下篇の作者は莊周を説話の作者と考えていたということになるわけであるから、莊周を語録の作者と見てはいなかったというになろう（注六）。

以上よりすると、天下篇の「以卮言為曼衍、以重言為真、以寓言為広。」という記述は寓言篇によったと考えられ、また天下篇の作者は卮言・重言・寓言が莊周の手になる説話であると考えていたわけであるから、当時の『莊子』がどのような形であれ、それらを莊周の著作と考えていたであろうことが知られる。しかし、前掲の寓言篇の記述の中に齊物論篇から引かれた部分があり、これらの部分がもと語録であった可能性もあることより寓言篇の作者がその語録から引用した可能性が考えられることはすでに述べたが、さらに寓言篇の寓言・重言・卮言についての記述は、天下篇のように莊周の学説を指したのではなく一般論として説いたと考えることが出来る。さらに言えば寓言・重言・卮言は『莊子』中の説話についての批評・評価でもなく、物事の表現の仕方についての記述であるとも解することができる。とするならば寓言篇のこの部分の論者は、現在の『莊子』中に見られるような説話を念頭においていたのではなく、原本『莊子』の記述をもとに言語の表現法についての論を展開したことになる。さらに、寓言・重言・卮言の記述を見ると

表現の仕方において違いがあるように思われる。前半の長梧子の発言については、その表現が感覚的であり、文学的傾向を持っているのに対し、後半の部分はいわば理知的であり思弁的傾向を持つものである。前半の長梧子の発言の方は、理論的に説き伏せようとはせず、巧みな例などを用い感覚に訴えて作者の思想を伝達しようとしているのである。後半の1・2を通して、作者の主張を論理的に展開させて論理において相手（あるいは読む者）を説き伏せようとする意図が見られるという点より、この前半部分と後半部分は本来別の文献であったと考える。先にも述べたように前半は逍遙遊篇の説話などと非常に近似した部分が見受けられるが、それに対し後半は齊物論篇前半部分の（論説部）に非常に似かよった形態をしており、この部分も（論説部）と同様の性格を持つものであり、語録としての性格を持っていると考える。さらに言えば（論説部）とここで扱っている後半部分は本来一つの同じ文献から採られたものではないかとも推測できるのである。例えばこの1については、（論説部）の一二（注五）

以指喻指之非指、不若以非指喻指之非指也。以馬喻馬之非馬、不若以非馬喻馬之非馬也。天地一指也、万物一馬也。

に近い表現であり、2については、一三

可乎可、不可乎不可。道行之而成、物謂之而成。惡乎然、然乎然。惡乎不然、不然於不然。物固有所然、物固有所可。無物不然、無物不可。

に近い表現である。また2の中の「天倪」の語は（論説部）に出てきた「真宰」・「真君」・「以明」・「因是」・「道枢」・「天均」・「兩行」などと類似の性格を持つもので、ある学派で用いられその学派の中では共通の認識を持たれていた語であることと見ることもできる。あるいは「曼衍」の語もそれに相当するであろう。なお「故寓諸無竟。」の表現は（論説部）一四の「為是不用而寓諸庸。」の表現にやはり近似している。もし

（論説部）とこの1・2の文献が同一の性格のもので本来語録的性格を持つものであるとすると、何者かの手によりこれらの部分が、それぞれあたかも前の説話の延長であるかのように巧みに前の説話に付されたという可能性も出てくる。

さらに2に共通する表現は、寓言篇にも見える。寓言篇においては冒頭で、寓言・重言・卮言を挙げ、これについて論述する際の卮言の説明の中の表現として用いられている。

寓言十九、重言十七、卮言日出、和以天倪。

寓言十九、藉外論之。親交不為其子媒。親父譽之、不若非其父者也。

非吾罪也、人之罪也。与己同則成、不与己同則反。同於己為是之、異於己為非之。

重言十七、所以已言也、是為耆文。年先矣、而無絳緯本末以期年耆者、是非先也。人而無以先人、無人道也。人而無人道、是之謂陳人。」  
卮言日出、和以天倪、因以曼衍、所以窮年。不言則齊、齊与言不齊、言与齊不齊也、故曰無言。言無言、終身言、未嘗不言。終身不言、未嘗不言。有自也而可、有自也而不可。有自也而然、有自也而不然。惡乎然。然於然。惡乎不然。不然於不然。惡乎可。可乎可。惡乎不可。不可於不可。物固有所然、物固有所可、無物不然、無物不可。非卮言日出、和以天倪、孰得其久。万物皆種也、以不同形相禪、始卒若環、莫得其倫、是謂天均。天均者天倪也。

この「卮言」に関する記述の中に、明らかに2の部分と関連のある記述が出てくる。まず「天倪」についてであるが、この語が再三用いられ「和以天倪」の語も繰り返し用いられていることから、この部分の中心の概念になる語であることが解る。また同時に（論説部）に見られた「天均」の語も出てきており、しかも「天均者天倪也。」という表現がある。さらにこの部分は（論説部）一三の



見卵而求時夜、見彈而求鴉灸。予嘗為女妄言之、女以妄聽之。奚。

旁日月、挾宇宙。為其昭合、置其滑滑、以隸相尊。衆人役役、聖人愚  
菴、參万歲而一成純。万物尽然、而以是相蘊。

予惡乎知說生之非惑邪。予惡乎知惡死之非弱喪而不知歸者邪。麗之  
姬、艾封人之子也。晋国之始得之也、涕泣沾襟。及其至於王所、与王  
同筐牀、食芻豢、而後悔其泣也。予惡乎知夫死者不悔其始之齋生乎。」  
夢飲酒者、旦而哭泣。夢哭泣者、旦而田獵。方其夢也、不知其夢也。  
夢之中又占其夢焉、覺而後知其夢也。且有大覺而後知此其大夢也、而  
愚者自以為覺、窃窃然知之。君乎、牧乎、固哉。丘也与女、皆夢也。

予謂女夢、亦夢也。是其言也、其名為弔詭。万世之後而一遇大聖、知  
其解者、是且暮遇之也。」

この説話については、見解が分かれる点がある。以上で説話が完結してい  
るとする見方もあるが、これに続く部分を長梧子の発言の延長と見る見方  
もあるのである。これに続く部分はいわば短文より構成されている。次に  
示すのがその部分に当たる。

1、既使我与若弃矣、若勝我、我不若勝、若果是也、若果非也邪。我勝  
若、若不吾勝、我果是也、而果非也邪。其或是也、其或非也邪。其俱  
是也、其俱非也邪。我与若不能相知也、則人固受其黜闇。吾誰使正  
之。使同乎若者正之。既与若同矣、惡能正之。使同乎我者正之。既同  
乎我矣、惡能正之。使異乎我与若者正之。既異乎我与若矣、惡能正  
之。使同乎我与若者正之。既同乎我与若矣、惡能正之。然則我与若与  
人俱不能相知也、而待彼也邪。

2、何謂和之以天倪。曰、是不是、然不然。是若果是也、則是之異乎不  
是也亦無弃。然若果然也、則然之異乎不然也亦無弃。化声之相待、若  
其不相待。和之以天倪、因之以曼衍、所以窮年也。忘年忘義、振於無  
竟、故寓諸無竟。

なお後半の部分に数字を付したのは、あるいはこの部分が齊物論前半の  
説話の後半部分（「論説部」）と同じように本来語録である可能性もある  
と考えるからである。前半の説話との関係を見る場合、前に付けて考える  
ことも可能であると同時に、それ自体独立しているとも見ることが可能であ  
るといふ点においても「論説部」と共通する点が見られる。

さて、前半の部分に注目すると、この説話は瞿鴿子と長梧子の問答から  
なるが、極めて巧みに構成されているものであることが解る。まず瞿鴿子  
の言葉の中に夫子から聞いた言として「聖人不從事於務、不就利、不違  
害、不喜求、不縁道。無謂有謂、有謂無謂、而遊乎塵垢之外。」の句を持  
ち出してくるが、これは逍遙遊篇において、肩吾と連叔の説話の中に、肩  
吾の言の中に接輿から聞いた話として「藐姑射之山、有神人居焉。肌膚若  
冰雪、淖約若処子。不食五穀、吹風飲露、乘雲氣、御飛龍、而遊乎四海之  
外。其神凝、使物不疵癘、而年穀熟。」という部分があるのと非常によく  
似ている。単に説話の中に説話を取り込んだという点だけではなく、それ  
ぞれ「聖人」や「神人」を描写するに当たって、「而遊乎塵垢之外。」や  
「而遊乎四海之外。」という相似た表現を使っているという点でも共通す  
る。

なお前半の説話の終わりの方に「丘也与女、皆夢也。」という部分があ  
るが、この「丘」は、瞿鴿子の最初の発言に「吾聞諸夫子、……」とい  
う表現があり、「夫子」という語が出てきており、この「丘」も孔子を指  
しているのである。前半の長梧子の発言は、先の引用にも示したよう  
に、四つの段落に分けられ、それぞれ違う材料を寄せ集めたようにも見え  
るが、最後の「丘」の語のあることより、まとまったものとして作られて  
いることは確かである。

しかし、後半の方は、1・2のそれぞれが齊物論篇の冒頭の説話の「論  
説部」と同様に語録的性格を持つ文献であると考えられる。前半と後半とは

然殺乱、吾惡能知其弁。」

鬻欠曰、「子不知利害、則至人固不知利害乎。」

王倪曰、「至人神矣。大沢焚而不能熱、河漢涸而不能寒、疾雷破山風振海而不能驚。若然者、乘雲氣、騎日月、而遊乎四海之外。死生無變於己、而況利害之端乎。」

これは鬻欠と王倪の問答からなる説話であり、鬻欠が王倪に対して「子知物之所同是乎。」と質問を投げかけ、王倪がそれに答えたという形をとっている。従ってこの部分では王倪の発言に重きが置かれている。鬻欠は王倪の思想を導き出す役を担っていると見ることが出来るのである。さて、いわば師匠の立場にある王倪の発言の中に世の常識に対して鋭い指摘をした奇抜とも言える表現が目につく。例えば傍線を施した部分などは、人間の価値観について他の生き物を持ち出して、それが絶対ではないということとを効果的に述べているし、王倪の最後の発言（「至人神矣。……」）では、至人のありさまを奇抜な、奇想天外とでも言うべき表現で描写している。なお前者の傍線部分では小動物を持ち出しており、これらの中には、「猿獼狙以為雌、麋与鹿交、鱸与魚游、」などがもし違った種類の生き物が交わるといふ意味であるとする（あるいは連帯を持って行動するということ意味であるとしても）事実と合致しない可能性もあるが、ここの表現においては実際の生息を描写した細かい観察に基づく所もあるのは確かである。このような表現は、逍遙遊篇の中に多く見られるものである（注三）。また王倪の最後の発言は、説話の構成の上で、あるいは表現の上でも逍遙遊篇の肩吾と連叔の問答と似ているところがある。逍遙遊篇の説話は、肩吾問於連叔曰、「吾聞言於接輿、大而無当、往而不反。吾驚怖其言猶河漢而無極也。大有逕庭、不近人情焉。」

連叔曰、「其言謂何哉。」

曰、「藐姑射之山、有神人居焉。肌膚若冰雪、淖約若処子。不食五

穀、吹風飲露、乘雲氣、御飛龍、而遊乎四海之外。其神凝、使物不疵癘、而年穀熟。」吾以是狂而不信也。」

連叔曰、「然。瞽者無以与乎文章之觀、聾者無以与乎鐘鼓之声。豈唯形骸有聾盲哉。夫知亦有之。是其言也、猶時女也。之人也、之德也、將旁礴万物以為一。世斬乎乱、孰弊弊焉以天下為事。之人也、物莫之傷。大浸稽天而不溺、大旱金石流、土山焦而不熱。是其塵垢粃糠、將猶陶鑄堯舜者也。孰肯以物為事。」

宋人資章甫、而適諸越。越人斷髮文身、無所用之。

堯治天下之民、平海内之政。往見四子藐姑射之山、汾水之陽、杳然喪其天下焉。

というものであり、肩吾の発言の中の接輿に聴いた話として「藐姑射之山」の神人をやはり奇想天外な表現で描写しており、その言いまわしの仕方について、この二つの説話は近似している。さらに説話の構成においても、教えに到達していない者（鬻欠・肩吾）が教えを身につけた者（王倪・連叔）に対して見解を問うという形式という点でも共通している。これは共通の説話群に属すると見なしてよい（注四）。従ってこの説話は、齊物論篇冒頭の説話が二つの部分（説話と語録）から構成されているのは性格が異なるものであるといえる。

## 二、

さて、この次に、瞿鷓子と長梧子の問答からなる中編の説話が続く。

瞿鷓子問乎長梧子曰、「吾聞諸夫子、『聖人不從事於務、不就利、不違害、不喜求、不緣道。無謂有謂、有謂無謂、而遊乎塵垢之外。』夫子以為孟浪之言、而我以為妙道之行也。吾子以為奚若。」

長梧子曰、「是黃帝之所聽也。而丘也何足以知之。且女亦大早計、

## 『莊子』 齊物論篇の構造

— 後半の説話を中心にして —

佐藤 明

## はじめに

『莊子』齊物論篇の前半部分は、一つの説話と見なすが従来の一般的な見解であるが、別稿においてそれは二つの部分に分かれ前半は説話であるが、後半は本来語録的性格を持つ文献であろうと考察した(注一)。そこで前者を(説話部)、後者を(論説部)と名付けたが、とりわけ(論説部)の方は『莊子』の最も古い部分に当たる可能性があり、その『莊子』のものとの形も『老子』と同じような語録的形態を持ったものであろうと推論した。

さらに、また別の稿においては養生主篇と逍遙遊篇について考察し、それらが巧みに編輯された編纂物であることも明らかにした(注二)。いうまでもなく逍遙遊・齊物論・養生主は『莊子』内篇の冒頭からの連続した三篇であり、特に逍遙遊・齊物論の二篇は『莊子』の中でもとりわけ優れた篇と考えられてきたということについては論を挟むまでもない。

齊物論篇の後半部分は、これらの三篇の中で考察を加えていなかったものであり、以上の見地を踏まえた場合この部分がどのような意味を持つものであるかを考えるのが小論の意図するところである。ここでの考察は二つの立場からなされる。第一は、語録的性格を持った文がこの部分に含まれるかどうかについて考えることであり、いま一つは齊物論篇のこの部分の説話の構造を考えることである。特にこの部分が編纂物であるとすれ

ば、以上の二つの立場からの検討を加えることにより、その成立の過程をも推察することができる。

この齊物論篇後半部分は中編の二つの説話に続き、篇末には短編の二つの説話が付されている。これらは説話そのものの価値という点からしても内容的に高いものであることは承認されよう。例えば齊物論篇の解釈が多くが篇全体を一人の手によって書かれたものとして考えてきたこと自体、これらの部分が優れているということの二つの証として見ることもできる。なお別稿においても何度か触れたが、『莊子』中の説話はそれぞれ独立したものと考えるべきであり、その篇の中のそれ以前の部分との結びつきを前提にして考えるべきではないというのが筆者としての立場であることとを贅言しておく。

## 一、

本稿で考察する最初の部分は中編の説話であると見てよい。

齧欠問乎王倪曰、「子知物之所同是乎。」

曰、「吾惡乎知之。」

「子知子之所不知邪。」

曰、「吾惡乎知之。」

「然則物無知邪。」

曰、「吾惡乎知之。雖然嘗試言之。庸詎知吾所謂知之非不知邪。庸詎知吾所謂不知之非知邪。且吾嘗試問乎女。民濕寢則腰疾偏死、鱗然乎哉。木処則惴慄恟懼、猿猴然乎哉。三者孰知正處。民食芻豢、麋鹿食薦、螂且甘帶、鴟鴞耆鼠、四者孰知正味。猿獮狙以為雌、麋與鹿交、鱗與魚游、毛嬙麗姬、人之所美也。魚見之深入、鳥見之高飛、麋鹿見之決驟。四者孰知天下之正色哉。自我觀之、仁義之端、是非之塗、樊